

# 山本正志のウクライナ旅行記

ヤルタ・オデッサ・キエフ 8 日間の旅 2005-8-23 ~ 30

今回の旅行はウクライナ。第二次世界大戦の戦後処理に関してアメリカ・ソ連・イギリスの巨頭会談が開かれた名勝の地ヤルタ、「戦艦ポチョムキン」の階段」で有名なオデッサ、京都市と姉妹都市のキエフをめぐる実質 1 週間の旅。団長は日本ユーラシア協会京都府連会長の長砂実先生、添乗員はおなじみの金森千鶴子さん、総勢 20 人。



レストラン・ツバメの巣



眠れるライオン像



8月23日午前関西空港発、タシケント経由でシンフェローポリ空港へ、バスでヤルタ。24～25日はヤルタとセヴァストーポリを巡り、ヤルタで3連泊。26日はヤルタからオデッサに向けてバスで500kmの旅、車窓から穀倉地帯ウクライナ大草原が。オデッサ1泊。27日はオデッサ市内観光。夜行列車でキエフに向かい、28日早朝キエフ着。キエフ市内観光、キエフ1泊。29日はキエフ空港11:05発で帰国の途へ。30日9時関空到着。



ソフィア大聖堂

## 8月23日

午前5時40分、自宅を出て関西空港までのシャトルタクシーに乗車。

8時前、空港窓口で団長の長砂先生や添乗員の金森さんはじめ懐かしい面々と一年ぶりの再会、早速搭乗手続き。最初のサンクトペテルブルグの時と同じウズベキスタン航空機(エアバスA300)でタシケントまで8時間。2時間ほどのあわただしい手続きでヤルタへ向けて今度はボーイング767で一路西へ。タシケントを出てからは眼下はまったくの荒地、砂漠なのか岩山なのか、1本も植物の影がない。褐色の不毛の大地あり、雪を戴いた山脈あり、ウズベキスタンはひろい。やがてひろい水面にでてずいぶんと時間がたつがまだ陸地が見えない。どうやら黒海上空を飛行しているようだ。

夕方(こちらの時間で)7時(日本時間夜中の1時)ヤルタ半島のシンフェローポリ空港に着陸、ウクライナ入国。まだ明るい。ここの空港はとにかく広い。滑走路に着陸して「ターミナルビルはどこ?」と見渡すが、見



えない。約2～3キロ（もっと距離があったかも）移動してやっとターミナルビルに。ところが、昨年までのロシアの時と同じで入国審査が遅い。どうやら一人ずつ名前を打ち込み「怪しいやつ」でないかどうかパソコン画面を見ながら確認しているので一人5～8分もかかる。私はみんなが終わった最後になったのでパスポートと入国カードを別の窓口に出すと「オー、ジャパン！」と笑顔であいさつをしてくれた（もっとも何と喋ってくれたのか理解不能だったが）これで夜の9時。それからシンフェローポリ中心部に入りレストランで遅い夕食、さらにヤルタのホテルまで約2時間、夜の12時にホテル到着（日本時間朝6時）。結局朝自宅を出てからホテルまで24時間、くたくた。

## 24日

今朝は6時に目覚め、昨夜の疲れもほぼ回復、早速ビデオと写真をパソコンに複写して、記録作成の作業にかかる。朝食の後、目の前の浜辺に出てみると8時というのに海水浴の人の多いこと。水温は約20度というからまさに適温。

今日午前中はバスでヤルタを後にして、セバストーポリへ。セバストーポリはソ連時代黒海艦隊の基地として一般市民は（もちろん外国人も）70数年にわたって立入り禁止となっていた軍港。ところが、行ってみると水辺近くのギリシャ古代からのヘルソネス遺跡（ヘルソネス国立歴史建築野外博物館）もあり、先生に連れられた子どもたちの一群や、ここでも岩場の海岸線と少しの浜辺に海水浴客がいるわいるわ。夏場こそ、といった様子で日焼けした男女がゆっくりと楽しんでいるが、聞けばこちらの夏休みは1ヶ月とか。道理で日本の浜辺での青白いまったく日焼けしていないにわか海水浴客とは大違い。どこやらの働き中毒の国の労働者諸君につめの垢でも煎じて飲ませたいものだ（労働者でなくて使用者側にだ！）

レストランで昼食の後、クリミア戦争パノラマ記念館へ。次は急遽組み込んだ湾内クルーズ。小さな遊覧船に乗って出発。湾内にはウクライナとロシアの海軍の艦艇や潜水艦がわんさと停泊中。説明によると「ソ連時代からの黒海艦隊の基地はウクライナが独立してもそのままロシア黒海艦隊の基地治して提供されているとのこと。人口も大半がロシア人で、軍隊関係の住民も多く、艦隊司令部にはロシア国旗がはためいている。クルーズが終わって、再びバスでヤルタへ。夕食はホテルの16階で。夜10時半、窓の外がなにやら騒がしいのであけてみると花火が次々と打ち上げられて、夜空に炸裂。お祭りの連続なのか、歓迎の行事なのか、しばしみとれる。



ロシアの潜水艦

### クリミア戦争

1853年10月から1856年の間、クリミア半島などを舞台として行われた戦争。バルカン半島における各国の利権（ロシア、トルコ、イギリス、フランス、その他）と民族対立（スラブ系、ムスリム系）に宗教対立（イスラム教とリスト教）など複雑な要素が絡みあった歴史的条件を背景としたフランストルコおよびイギリスを中心とした同盟軍とロシアとの戦争。



汎スラヴ主義を掲げるロシアが、勢力が衰えつつあったトルコを巡る利権争いをめぐって引き起こされた戦争で、最終段階でのクリミア半島をめぐる戦闘では、フランスとイギリスは1854年3月ロシアに宣戦布告。両国は軍隊をクリミア半島に上陸させ、ロシア黒海艦隊の基地がある要衝セバストポリを包囲し、近代兵器の性能差もあって、街は1855年9月に陥落。ロシアの敗北で終結。1856年3月にパリ条約が成立した。

後進性が露呈したロシアでは抜本的な内政改革を余儀なくされ、オーストリアも急速に国際的地位を失う一方、国を上げてイタリア統一戦争への下地を整えたサルデーニャや、戦中に工業化を推進させたプロイセンがヨーロッパ社会に影響力を持つようになったこの戦争の最中1854年、ナイチンゲールが38名の看護婦を率い従軍、「クリミアの天使」とも呼ばれた。

## 25日

今日は本格的なヤルタ市内観光。まずはにぎやかな海岸通り、広場には今なお巨大なレーニン像が。現地ガイドのワーニャさんの話。「レーニンが怒った顔をしているのはなぜでしょうか？ 共産主義が崩壊し、資本主義の社会となりましたが、像の向いにはマクドナルドやアメリカ資本が進出しています。それが我慢ならないのです」とのこと。

やがてチェーホフの家博物館へ。チェーホフは健康上のこともあって医師のすすめで温暖なヤルタでの生活によって罹患していた結核の持病にもかかわらず平穏は作家生活を送っていた。妻であるモスクワポリショイ劇場の女優オリガ・クニッペルを伴ってドイツ旅行に行き、気候不順が原因でかの地で急逝した。



チェーホフ



ヤルタ会議におけるチャーチル、ルーズヴェルト、スターリン。

次は第二次世界大戦終末の1945年2月にヤルタ会談の舞台となったリヴァーディア宮殿へ。アメリカはルーズベルト大統領、イギリスはチャーチル首相、ソ連はスターリン首相が出席し、戦争遂行と戦後処理、国際連合創設およびソ連の対日参戦などを約した。(千島列島のソ連帰属も秘密合意された)この宮殿は元々ロマノフ王朝最後のニコライ 世のものであり、各部屋にはその家族の使用していた家具や装飾の絵画・ピアノなどが残されている。

今日の昼食は有名な「ツバメの巣」レストラン(トップの写真)。イタリア料理でパスタ。ツバメの巣のまわりは観光客でごった返していたが我々一同だけは悠々と少し遅いランチ。

次はアルプカ村のポロンツォフ宮殿。そもそも少数の原住民しか住んでいなかったヤルタを町に昇格させ、皇帝から許可を得て港を開き今日の保養地としての基礎を築きあげたのがポロンツォフで、彼の資産は(奥さんの資産も巨大で)ツアーを上まわっていたという。庭園にはヒマラヤ杉やレバノン杉もあって、どの樹木も成長を遂げて森林公園となっている。ここはヤルタ会談の時のチャーチルの宿舎となったことでも有名。南面の階段にはライオン像が(トップの写真)。

マサンドラワインの試飲会場へ。地下に下りると部屋には各テーブルに一人10のグラスワインが。それぞれ色も香りもちがうのは、材料も寝かした年月も、アルコール度数も糖分の割合も

千差万別。夕食は「皇帝のキュージータ」。ここで参加者一同の自己紹介、といっても大半は昨年までのおなじみの顔ぶれ。重田澄男・和子夫妻と吉坂大慈先生が新顔。洛陽総合高校勤務の時期、徹底的な差別扱いと組合攻撃をうけ、理由なき退職金差別撤廃を裁判で争っていた畠山千恵子さんの京都地裁判決が7月27日にあり、退職金差別を認めないという勝利判決があった。畠山先生への支援は旅行参会者にとっても「身内の問題」でもあった。(支援する会の会長は長砂先生)暗くなってホテル到着。

## 保養地としてのヤルタ 海岸線にサナトリウム

気候温暖で黒海に面して長い海岸線を持つヤルタはソ連時代のゴルバチョフの別荘をはじめ、歴代貴族や幹部政治家の別荘が並んでいる。これらの建物のいくつかはサナトリウム、老人ホームとして使用されている。しかし最近では外資系ホテルも多いという。



## 「ヤルタ会談と第二次世界大戦後の世界」 一考察 -----

### 年表

- 1939/08/23 独ソ不可侵条約締結。ポーランド、バルト三国分割の秘密議定書
- /09/01 ドイツ、ポーランド侵攻 第二次世界大戦始まる。
- /09/17 ソ連軍東ポーランド侵攻
- 1940/06/14 ドイツ軍、パリ占領
- 1943/01/31 スターリングラード攻防戦、ドイツ軍壊滅
- /09/08 イタリア、無条件降伏
- 1944/06/06 連合軍、ノルマンディー上陸作戦開始
- 1945/02/04 ヤルタ会談 (~02/11) ヤルタ協定
- /04/30 ヒットラー自殺
- /05/07 ドイツ、無条件降伏
- /07/15 ポツダム会談 (~08/02)
- /08/14 日本、ポツダム宣言受託
- 1946/01/10 国連第一回総会



リヴァディア宮殿

## ヤルタ会談

1945年2月4日～2月11日にヤルタ近郊のリヴァディア宮殿で開催された連合軍首脳会議。ルーズベルト米大統領、チャーチル英首相、スターリンソ連首相が出席。中心議題は第2次世界大戦の戦後処理。成立した

「協定」では、

- ・降伏後のドイツをフランスを含めた4国で分割占領 連合軍管理委員会によって統治する
- ・ドイツ占領から解放された地域では、自由選挙にもとづく民主的な政府を樹立する
- ・ソ連のポーランド東部(旧ドイツ領)領有
- ・ソ連はヨーロッパ戦争終結後、90日以内に対日宣戦布告。ソ連のサハリン(樺太)南部、千島列島、中国大陸東北部での権益獲得

## 終戦問題

アメリカ・イギリス・ソ連 3 大国にとって対ドイツ戦争終結が予想できたこの会談では、戦後世界の再建問題が共通の関心事で、戦時下の 3 国の協力関係を戦後も維持できるかが重要問題であった。ルーズベルトの主要な意図は、つぎの三つがあった。第一、彼は、設立を目前にひかえた国際連合にソ連を最終的に繋ぎとめたいと考えた。第二、当時、日本は越年しても戦いつづける力をもつだろうと考えていたので、大統領はソ連の対日参戦を望んだ。第三、彼はドイツおよび東部・中部ヨーロッパの取り扱いにつき、最終的一致をのぞみ、ドイツ問題については原則的一致が生まれた。

ドイツの敗退に伴い、ソ連軍の東欧占領は確実にになっていた。ルーズベルトはそうした状況下で早急に戦後を協議する必要に迫られていたのに対し、スターリンはソ連軍の進撃がある限り、協議は遅ければ遅いほど有利と判断していた。あせるルーズベルトには結局、チャーチルが「最悪の場所」と呼んだヤルタに向かうしか選択の道は残されていなかった。

米海軍長官フォレストルは、1945 年 5 月 1 日付の日記にはこう書いている。「どこまで日本を破壊すべきなのか。日本をモーゲンソー化（非工業国）すべきなのか。もしそうなら、極東に増大するロシアの力に中国（蒋介石）をもって対抗しようというのか。米国はまるで野球ゲームのように戦争に勝つことばかりに集中してきたが、ドイツと日本が消滅した後の国際関係への思慮が欠けていたのではないだろうか」（ウォルターニミルズ著『フォレストル日記』）

ヤルタ会談の時点では、アメリカの軍部は対日上陸作戦に伴う米軍の損失を深刻に憂慮しており、原爆の研究開発は最高の秘密事項である上、その完成の目途は立っておらず、さらにソ連の国際連合設立への協力と蒋介石政権支持への期待があつて、ルーズベルトとしては対ソ友好政策の維持を最優先事項と考えていた。このように米ソ協調の上に再編成された国際秩序はヤルタ体制と呼ばれ、第二次世界大戦後のアメリカ・ソ連 2 極構造時代のガイドラインが設定されたが、しかし、その後まもなく同年 4 月 12 日のルーズベルトの急逝を契機として、アメリカとソ連の対立が顕在化し、冷戦時代に移行していくのである。（レッシング『ヤルタからポツダムへ - 戦後世界の出発点 - 』）

## ヤルタ会談の前段

米国は参戦以来、「ドイツをまず叩き、しかる後に日本を叩く」という欧州優先戦略をとってきた。米国の戦略物資のほぼ八割を欧州戦線に投入し、英仏を隔てるドーバー海峡を渡ってベルリンを目指すという「ラウンドアップ(結集)」作戦は、米陸軍を中心に常に重視されてきた。だが、カサブランカ会談の直前に米統合戦略委はマーシャルに次のような報告書を提出している。「戦後欧州におけるソ連の脅威を阻止するため、ドイツの敗北をむしろ遅らせるべきだ。それによってソ連軍を消耗させ、さらにソ連の国力そのものの減退も招くことができる」「今日の敵」と「明日の敵」を戦わせ漁夫の利を得る戦略は英国が伝統的に踏襲してきた。（ルーズベルト秘録）

## アメリカの対日戦争終結政策

ヨーロッパに戦火が消えたあと、アメリカは孤立無援の戦いを続けている日本との戦争の終結をいかにして実現していくべきかを模索していた。5 月 25 日早期終戦を実現するアイデアを提議したのは国務次官 J. グルーであった（グルーは真珠湾攻撃までの 10 年間駐日大使）その提案では、天皇制の存続を許すことをあらかじめ公約し、天皇自らが日本軍の降伏を命令すれば、最小限の犠牲で戦争を終結することが可能という方法である。しかし、トルーマンの選択した方針は、原子爆弾の使用という衝撃的な方法であった。

---

## 26日

今日はヤルタからオデッサへの移動日、バスで約500kmの長旅。朝起きて早速金森さんがおにぎりを2個届けてくれたのでそれを食べて、ホテルから浜辺へ。ホテルの庭からエレベーターで地下に降りると、長い通路を経て浜辺へ。どうやらホテル占有のプライベートビーチになっているらしい。浜辺の端が鉄柵で仕切っている。バスの出発は8時なので黒海で泳ぐには短時間となるがとにかくここまで来たからには何事も経験。水温は20というから暖かい。波はなくて穏やか、海水だけれども少し塩分が少ないようで、故郷の鷺羽山、下津井の瀬戸内海の海水に比べて塩辛くない。気持ちよく30分ほど水に入って、ホテルに戻ってシャワー、着替え、スーツケースに詰め込んでバスに乗車、出発。



ポチョムキン像

3階のレストランで遅めの夕食。ホテルは今回の旅行では最高クラスで快適。埠頭には地中海クルーズだろうか、巨大客船ミネルヴァ 世号(30,277t)が停泊していたが翌日午後にはその雄姿はなかった。

途中、ヘルソンで昼食、ボルシチとロールキャベツはおいしかった。ヘルソンはエカテリーナ大帝の愛人(秘密で結婚していた?)ポチョムキンの建設した街といわれ、中央広場には彼の銅像が。さらにオデッサまでの道をバスで。とにかく行けども行けども広い平原。道の両側にはひまわり畑やトウモロコシ畑が続くこと5~10km。こんな広い農地をどうやって種をまき、どうやって取り入れをするのだろうか。機械化が進んでいるとはいえ、作業に取り掛かってもキリがないだろうと思うくらい、とにかく果てがない。夜7時半ころにオデッサの町に入る。やはりオデッサは黒海きっての大都市、町を走っている車もグレードアップして、日本車も多い。寿司店もあるという。ホテルオデッサは港の埠頭に建てられた近代的な高層ホテル、



## 27日

今日はオデッサ観光、最初はオデッサ海上クルーズ。しかし海は赤茶色で鮮やかな群青でない。流入する河の水の影響だろうか。

次に訪れたパルチザンの栄光博物館には驚かされた。元々は建築材料としてのレンガの代用としてやわらかい石質の石材を切り出した跡の延々と続く洞窟、その延長1000kmというからすごい!これが1941年からのナチス占領の時期、抵抗部隊のパルチザン45人の活動の場となったのだから住民の支援がなければ不可能。



村を占領したドイツ軍は軍用犬を使って住民の中で連絡活動中のパルチザン戦士を摘発したり、入口から毒ガスを吹き込んでの攻撃を繰り返したが、洞窟はいくつにも枝分かれしており、迷い込んだら脱出不能、奥までは侵入できなかったという。

昼食はウズベキスタン料理店。午後は中心部の広場、終末は結婚式が多く、あちこちに花嫁が（花婿も）わんさかといて友達やらもとりまき、にぎやかなこと。それにしても花嫁さんはみんなかわいい。オデッサ考古学博物館見学。学芸員の女性の熱心な説明、秘蔵の金貨の部屋も開けてくれて大サービス。



オデッサの階段

オデッサの階段、「戦艦ポチョムキン」の舞台となった場所だが、レストランや売店、ビルが立ち並びすっかり映画の面影はない。しかし両側を木立に囲まれた階段を下から見上げると、確かにコサック兵による虐殺の行われた映画の場面が彷彿としてくる。



## 映画「戦艦ポチョムキン」

<時は1905年第一次ロシア革命前夜、戦艦ポチョムキン号の船上では、ウジのわいた食肉など、きわめてひどい処遇に対し兵士たちがワクリンチュクという一水兵の呼び掛けにこたえ一斉に蜂起。反乱は成功するが、士官の報復によりワクリンチュクは死ぬ。船はオデッサ港に入り、人々はワクリンチュクの死体を幾重にも取り囲み深い悲しみに沈む。怒り、デモ、赤旗掲揚。食料を乗せた小舟の群が船に向かう。長い石段の上は、戦艦ポチョムキン号の反乱の成功を祝う人々でごったがえしている。その歓喜の高揚を断ち切るかのように銃声が。群衆は階段を上から下へかけ降りる。兵士たちは群衆を追い落とし、容赦なく殺戮を続けていく。美しい母親が赤ん坊を乳母車に乗せて逃げる。母親は自分の体で乳母車をかばう。射たれてのけぞる母親。ついに乳母車は階段をころげはじめ。惨劇の後、ポチョムキン号の中で不安な一夜を過ごした水兵が水平線に政府軍の艦影を発見する。戦闘準備の号令で緊張の時は流れ。しかし敵艦は発砲せず、ポチョムキン号は艦隊の間を勝ち誇って進んで行く>

ポチョムキンの階段を中心に市内見物の後、買い物と自由行動。早速インターネットカフェをさがして日本の状況にアクセス。駒大苫小牧の監督が処分を受けただけで優勝旗返還（京都外大西の優勝）ということにはならなかったことを確認。日本共産党のホームページ、市会議員のページも開いて選挙の様子も確認。「原としふみ事務所開きに250人！」のニュースも確認。夕食は伝統的ウクライナ料理、鶏肉なので金森さんが特別メニューを頼んでくれてベジタリアン料理。ウクライナ楽器のバンドウーラ演奏や民族衣装のお嬢さんたちのコーラスでゆったりとした時間を過ごす。少し早めにレストランを出て駅へ。夜行寝台で10時過ぎ、キエフに向けて出発。パソコンやカメラの充電もできる。金森さんがおにぎりを差し入れてくれ、まずはビールで乾杯。



## 28日

列車はキエフへ向かって驀進中。昨年のシベリア鉄道(ハバロフスク - ウラジオストック)と違ってレールは継目なしで静かとはいえないが快適、それに今回は全員2人部屋となったので、私はホテルと同じで1人部屋、心おきなくパソコン作業も。7時半過ぎにキエフ到着、ホテルで朝食の後キエフ観光。最初はキエフ大学、黄金の門、聖ミハイル修道院(世界遺産)では鐘楼の上まで登りつめるとキエフ市内が一望できる。ソフィア大聖堂は見るからに新しい教会だが、第二次世界大戦中にナチスドイツではなく、スターリンの命令で共産党政権によって大部分が爆破されたという。モスクワでもそうだったが、ソ連崩壊後、市民の寄付と政府の支援で教会が再建されている(ワーニャさんの話では「今のユーシェンコ大統領は3期目だが、最初の4年間は道路をつくり、次の4年間は悔い改めたのか教会ばかり造って現在は3期めだという」。ソフィア大聖堂の壁面には「共産党政権による大虐殺」告発の図も掲げられており、隠されてきた歴史の発掘作業は今も続けられているという。



黄金の門



聖ミハイル修道院鐘楼



ソフィア大聖堂の壁面告発の図

はるかな丘の上に立つのは巨大な女神像で、第二次世界大戦でのキエフ解放記念だそうだがキエフ市民はソ連(の価値観)押し付けのこの像を「婆の像」と呼んで嫌っているという。近いうちにこの像もなくなってしまうかも。

午後はケヴォ・ベチェルスカヤ修道院へ。地下の墓地(地下道)には創立した僧たちのミイラが置かれていて、ろうそくを片手に参拝者が長い列をなして絶えることがない。

ウクライナホテルに到着、ここで夕食、旅行の反省会でみんなが一言づつ発言、この場にキエフ在住の数人の方が参加され、「久しぶりに会った祖国の人たち」との歓談ということで楽しいひと時を過ごした。

9時半ころ部屋に帰って今日の記録をまとめていると、



窓の外で大きな炸裂音、広場には多くの若者たちが集まり、夕方から巨大な音量で野外コンサートが開かれていたがやがて花火大会となった。それも10時過ぎには音楽も聞こえなくなって、催しは終わったらしい。ただし群集はずっと広場に遅くまで残っていた。この日は「石炭労働者の祭り」だったという。明日は朝早くホテルを発って帰国の途に。



ソフィア大聖堂



## ウクライナの女性

夕食の時、私が直感で「ウクライナでは女性が強いと感じた」と発言をしたところ、現地の小野元裕さんは「本当にウクライナの女性は強いです」といって紹介してくれたお話。まず電車やバスの中で、スリはいるけれども痴漢は一人もない、ということ。女性に対し悪ふざけであっても、いたずらなどしようものならこの国ではただでは済まされないということらしい。また、会社が終わって30分で帰宅できるところ、40分かかったら「10分間はどこで何をしていたのか」と奥さんからきびしい追及にあうという。「日本での亭主関白がなつかしい」とも。確かに服装にしても、ヤルタ、オデッサ、キエフでも女性は輝いている、ということはそれだけ自己主張がはっきりしていて、男性のほうがつつましい、というのは私の一週間だけの滞在での直感。

## 29日

キエフ滞在はわずか1日ということで今回は十分な観光の日程を取ることができなかったが、「キエフ・ルーシ」と呼ばれるようにキエフは1500年の歴史を持つ古都である。またいつかゆっくりと訪ねることを思いながら、朝ホテルを出発し空港へ。途中、ウラヂーミルの丘に立ち寄る。ドニエプル河の眺望が広がり、左手の森の中には10世紀にキエフ・ルーシの国教としてキリスト教を受け入れたウラヂーミル大公の像が。午前11時過ぎワニャさんともお別れ、離陸。タシケント経由で30日朝9時、関西空港着。日本は暑い！



## キエフの創設

キエフはおおよそ5世紀頃に建設され、コンスタンティノーブルとスカンジナビア半島の間の交易の拠点となっていた。ルーシと呼ばれるようになるこの地域がスラヴ人の統治下に入ると、この町は町の建設者キーフの名に因んでキエフと呼ばれるようになったとされている。12世紀の初頭に編纂された『原初年代記』に現れるキエフの町の創設にかかわる伝説『過ぎし年月の物語』

<東スラヴ人の中でキエフ周辺に住んでいたのはポリャーネ氏族であった。そこに3人の兄弟、キー、シチェク、ホリフと一人の妹ルイベジがいた。キーはポリャーネ氏族の長であった。そして彼らは町を作り、長兄の名前にちなんでキエフと名づけた。これがキエフの始まりである。キーはビザンツ帝国の首都コンスタンティノーブルにも赴き、そこでビザンツ皇帝から歓待されたという。年代記はキエフ建設の時代を記していないが、



船に乗る3兄弟と妹の像の周りは婚式を終えた若いカップルが。

6世紀後半のことと推測されている >

## ウラヂーミル大公の改宗

ところで現在ウクライナもロシアも信仰はロシア正教信者が圧倒的に多いが、ロシア正教の発端となったのがウラヂーミル大公（在位978～1025）のキリスト教への改宗であった。

<イスラム教を信仰するブルガール人は「マホメットは割礼をせよ、豚肉を食べるな、酒を飲むなどと言っています」といった。ユダヤ人が来て「我々の掟は、割礼をし、豚肉・兎肉を食べず、安息日を守ることです」といった。ウラヂーミル大公の質問に「神は我々の父に対して怒られ、我々の罪のために我々を国々に散らされました」と答えた。そこで大公は「自分たちが神によって退けられ、散らされているのに、どうして他の者たちに自分の信仰を勧めるのか」と言った。大公がギリシャに送った使者の報告で「彼らの教会では天上にいるような心地で、地上にはこれほどの栄光も美しさもありません」飲酒も結婚も許されるという。そこでウラヂーミル大公はギリシャ正教に改宗することにした >

大公がギリシャ正教を選んだことは、後世ロシアがローマ・カソリックが主流の西欧やポーランドとの政治的、文化的断絶を生むきっかけとなった。

## キエフの変遷

882年から1169年まで、キエフはキエフ公国（キエフ・ルーシ）の首都であったが、1240年のモンゴル帝国による征服により、決定的な打撃を受けた。1569年にはポーランド領に入ったが、1648年にはウクライナ・コサック国家の一部としてポーランドから独立。1667年、ポーランドとロシアの戦争が講和を迎え、キエフはロシア帝国の版図と定められた。1853年のクリミア戦争を経て、ロシア・オーストリア帝国・ポーランドの支配と独立を目指す運動との対立が続く中、第1次世界大戦の最中ロシアにボリシェビキ政権が誕生した。ウクライナ独立勢力とロシア革命政権の赤軍、ヨーロッパ諸国の干渉・白衛軍支援という複雑な政治的環境のなかで最後は赤軍の勝利となる。第二次世界大戦では、侵攻して来たナチス・ドイツ軍がキエフを占領。1943年11月6日にソビエト軍によって奪還されるまでドイツの占領下にあった。キエフは、1991年のソ連崩壊により、新たな独立国ウクライナの首都となった。

### ウクライナ・メモ（在ウクライナ日本大使館ホームページより）

対ロシア関係 ウクライナは国内に約1,000万人のロシア系住民が、一方ロシアにも約400万人のウクライナ系住民が居住する。対ロシア貿易はウクライナにとって輸出の17.8%、輸入の37.2%（02年）を占めており、特にエネルギー（主にガス）供給に関して、ウクライナはその大部分をロシアに依存している。

国防・基本方針 ウクライナは主権宣言（90年7月16日最高会議採択）で「将来において軍事ブロックに属さない中立国となり、核兵器を使用せず、生産せず、保有しないという非核三原則を堅持する国家」となることを明らかにしている。ロシアの戦略核も96年6月1日、クチマ大統領がウクライナ領土からの核弾頭完全撤去を発表。

文化・芸術 キエフ市の国立オペラ劇場をはじめ、主要な都市には劇場、交響楽団、音楽・芸術クラブ等が存在する。ウクライナゆかりの芸術家としては、ゴーゴリ(1809-52 作家、劇作家) チェーホフ(1860-1904 作家、劇作家) ムソルグスキー(1839-81 作曲家) プロコフィエフ(1891-1953 作曲家、ピアニスト) I・エレンブルグ(1891-1967 作家) 音楽家ではV・ホロビッツ(1904-89) E・ギレリス(1916-1985) D・オイストラフ(1908-1974) S・リヒテル(1915-1997) I・スターン(1920～)がウクライナ生まれ。